

植えています。これも後でスライド(No.3)を見ていただきます。  
 それでさきほど申しましたように、中国の奥地の方に行きますと低くして植えています(No.4)。ところが上海までくると、もうそんなことをしたところに牡丹を植えると腐ってしまう。上海は日本と同じ植え方になっています。

中国人は昔から黄色のものを非常に尊重しました。ですから中国の古い絵を見てみますと、黄色い牡丹が出てくるわけです。しかし我々の栽培しているがきりでは、黄色い牡丹というのはありません。ありましてね、それはうす黄色の牡丹にすぎず、純黄色の牡丹というのはないんです。ところがチベットで、純黄色の野性の牡丹が発見されました。19世紀のことです。その黄色の牡丹、学名はペオーニア・ルテアといいます。それを発見しましたフランスの神父さんは、その黄色の牡丹をすぐ本国に送りました。フランスでは、それと普通の牡丹を交配しました。

そして交配をくり返し、黄色の八重の牡丹をつくりました。残念ながらね、その牡丹には非常に欠点があります。なぜかという元の野生のペオーニア・ルテアという種類は、花が小さいが色が非常に美しい黄色でした。ところがそれは、花首が非常に長いのです。ですから、まっすぐ立たないで横になってしまいます。交配したものはその悪い癖を貰って、花は八重の綺麗な大きな黄色の牡丹が出来ましたが、首が長いものですから、ほっておくとだらんと首がさがってしまい、せっかくの八重も下を向いて見ることが出来ません。ですから黄色の牡丹を栽培すると、必ず支柱を付けています。そのためこれは何とかならないかと言っておりました。その後、やはりチベットで、まっすぐ茎が立って、首が垂れない黄色の牡丹が発見されました。それをアメリカでは持って帰り、首の垂れない黄色の牡丹をいろいろ作り出そうとしています。まだアメリカの牡丹では、素晴らしい八重は出来ていませんが、一重のものは垂れないまっすぐな黄色の牡丹がいろいろ出てきて、日本にも入ってきています。それもスライドで見ていただきます。そういう訳で黄色の牡丹の改良というのが、20世紀になって進みました。その程度の牡丹の改良は進みましたが、八重のいろいろな花色、形は、あまり変わっていません。そして中国ですでに元の時代に描かれた絵を見てみますと、白、桃色、赤、紅、そしてそのほかに黒色などの牡丹の花が出てきます。今日でも黒色牡丹がごぞいます。後でスライドを鑑賞いれますが元の時代といえますと、600年、700年位前です。その頃から中国では、花色が、ほとんど揃っていたということになります。

色々申し上げましたが、これからスライドを見ていただきます。スライドでなるほどこういうものかということ、納得していただければ幸いです。

(文責：友の会事務局)

プロフィール

塚本 洋太郎氏

昭和12年京都大学農学部卒、昭和24年大阪府大農学部教授を経て昭和27年、京都大学農学部教授、昭和50年京都大学停年退職。  
 (現在) 社団法人フラワー・ソサイティー会長、同花と緑の博覧会協会副会長。

京大在職中、国際園芸学会委員として国際会議に度々出席。以後園芸植物調査のため世界各国への旅行を重ねている。著書・論文等多し。



企画展の御案内

第27回企画展

朝鮮陶磁シリーズ - 15

『三島曆手展』

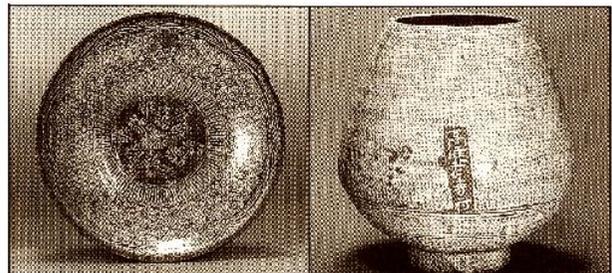
会期：平成2年6月26日(火)～9月30日(日)

会場：当館企画展示室

■「三島曆手展」

15世紀の李氏朝鮮王朝では、各地の窯で様々な技法の焼きものが生まれました。その中に、「曆手」と呼ばれるグループがあります。成型後、生乾きの裡に型押しで文様をつけ(これを「印花」という)、その凹みに白土を埋め表現する手法です。この手法の作品に限って「仁寿府」「礼雲寺」といった役所名と、「金海」「慶州」などの地名が白土象嵌で表わされています。これは貢納品に標識をつけることによって、官物の隠匿、盗用を防ぐためのものと言われていますが、その文字の有無は、陶磁史の編年を知る上でなくてはならぬと同時に、記された位置、文字の筆勢などによって作品に素晴らしい装飾効果をもたらし、一層の魅力を添えることにもなります。

同展では、このような文字を持つ作品を中心に展示し、その意義を探ると同時に研究と鑑賞に供するものです。(K)



粉青沙器印花 菊花文 鉢 「内 馳」銘  
 重文 粉青沙器印花 蓮珠文 芋頭水指 「高靈仁寿府」銘

編集後記

春以来、美術館の受付カウンターには「東洋陶磁の展開について——お知らせ」という掲示が貼り出されたままです。昨年の秋から、常設展収録「東洋陶磁の展開」改訂版の作成作業を行なってきましたが、その完成が大幅に遅れ、その前に従来のものが売り切れてしまったためです。随分と欲張りなカタログ作りをしたため、予想した以上に時間がかかってしまいました。(内容についてはあえて触れません。完成品を請う御期待！)当初の完成予定の5月中旬が7月上旬までずれ込んでいます。現在、図版部分の色校正の段階ですが、受付りの掲示が再度書き換えられるのではないかと、冷や汗ものの毎日です。(N)

大阪市立東洋陶磁美術館



友の会通信

ASSOCIATES NEWS No.20

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局  
 発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の舞台裏 (17)

写真資料は文献資料とともに、美術館の研究活動にとって不可欠な資料であり、また広報活動における重要な資源でもあります。ここでは写真撮影のソフト面について、いくつかの問題点をご紹介します。

美術品にはいろいろな種類がありますが、なかでも撮影の難しいものが陶磁器であるとよくいわれます。たとえば絵画なら水平の位置にカメラを構え、画室に均等に光を当てることができたら、撮影の基本の条件はほぼ整えられることとなります。彫刻の場合も、撮影位置とライティングによってさまざまな表現が可能となり、それぞれ撮影者の個性を示すことができます。したがって美術品のあるがままの姿を写しとる客観的表現と、ある側面を抽出して強調する主観的表現がはっきり分れるのも、彫刻の写真においてです。ところが陶磁器、とくに古陶磁の場合は、まず撮影位置の選択一つ取ってもどの部分を正面に捉えるかが問題となってきます。正面性をそなえていない作品が多いからです。また物の前方、やや高目の位置から俯瞰さみに撮影することが常道ですが、その位置を少しでも誤ると、焼きものの微妙な形はたちまちくずれて見えます。さらに陶磁器に対するライティングは、カメラマン泣かせと言われるほど難しいものです。一灯から数灯のライトをどのような位置から物に当てるか、当て方によって光の玉や束が物の美観を損なう邪魔な箇所に入ります。それを避けるためにもあって最近ではストロボ撮影をする人が増えてきましたが、この陶磁器に限っては、ストロボ撮影は物の味わいを十分生かさない傾向にあるように私は考えています。いずれにせよライティングは撮影に当たってもっとも肝心な要素で、一点の撮影に数時間かかることもあり、時間の制約がある場合は困惑します。とくに光沢の強い陶磁器で徳利形のものや、カメラや撮影者の姿まで、物の表面に映しこんでいることがあります。陶磁器の種類では青磁と白磁が難しく、この両者が撮影できればすでに一人前といえるでしょう。

いずれにせよ、陶磁器のもつ美的特質を瞬間的に的確にとらえ、それを撮影条件にす早くとりこむことができる学芸員自身が、撮影技術の習得にはげむことがもっとも望まれるわけです。

大阪市立東洋陶磁美術館  
 館長 伊藤 郁太郎

◆ 第17回講演会要旨 ◆

# 『牡丹の美術』

日時：平成2年4月21日土  
午後1時半～3時半

会場：中之島中央公会堂・3階中集会室

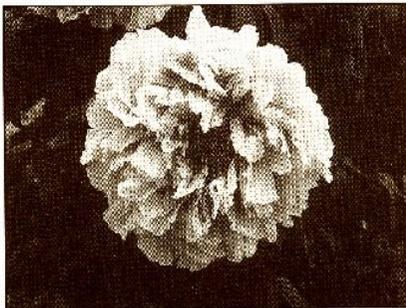
講師：京都大学名誉教授・塚本 洋太郎氏

只今ご紹介いただきました塚本です。私は園芸植物の専門屋であります。皆さんご承知のように、園芸植物というのは花木とか、草花などを含みます。その一番盛んなのは、今もってヨーロッパです。

日本の園芸は、江戸時代の末期には非常に発達しておりました。万延元年（1859）の秋、英国のコバート・フォーチュンという有名な植物採集家が日本にやってきて、横浜から江戸まで歩きました。その年の春3月3日には、皆さんご承知の大老井伊直弼が討たれました。国内は騒然としておったんですけども、江戸の庶民達はそういうことに関係なしに、秋には沢山のいろんな花形の菊を作っていました。フォーチュンはその菊をみて感心しております。

わたしは、三十二年前に国際園芸学会に出席のためヨーロッパに行きまして以来、何回も調査をかねて出張していますが、この間に美術館や博物館にでかけました。私の専門である植物、園芸植物が、絵や美術品にどういふふうにかわっているかということ調べてきました。その間、丹念にカードを作っておりましたので、たくさんカードができました。それを中心に、絵の中に出てくる花について、今まで本を3冊書いております。比較的新しいものは朝日選書のなかに『私の花・美術館』という題で出版しております。その中に牡丹のこともいくらか書いてあります。牡丹は皆さんご承知のように、中国から入ってきたものです。では、中国のどこが原産地であったかといいますが、山西省の山の中に自生しておったんです。この牡丹は根がごぼう根と言ひまして、横に長く延びるんです。それは岩山に自生しておりますので、下の方には入れない。そのために横に延びるんです。そういう性質を持っております。そして、わりあい冷涼な地帯を好み、暑い所ではうまく栽培ができません。日本にいつ入ってきたかはつきりしませんが、平安時代にはもちろん入っておったとおもわれます。

日本人は今日に至るもそうですけど、外国からいろんないい物を取り入れてはそれを改良するという性質を持っております。ですから、牡丹も日本に入ってきたからどんどん改良



薄雲門(スライド No.1)

されました。江戸時代になりますと、逆に中国にこれを輸出しております。なぜ分るかと言いますと、長崎に入ってきた中国船は、いろんな物を運んできますが、その帰りに、椿、牡丹やいろんなツツジ類、こんなものをたくさん積んで帰国している記録があるんです。しかし、

私は2度中国へ調査に行きましたが、ただ見る程度では、その牡丹が中国産のもので、日本から帰ってきたものか分かりません。このように牡丹に限らずほかにも日本は、中国から梅とか、菊とか重要な園芸植物を輸入しています。これをことごとく日本的に改良してまして、そして中国とは違ったものに作り上げていきます。もちろん盆栽もそうで、日本に入ってきてから日本式に高度なものに仕上がりました。

中国では牡丹芍薬は古くから薬草として栽培されておりました。それが隋の時代(6世紀末)では観賞植物の花として改良されました。それも当初、芍薬と牡丹は、優劣つけがなかったのですが、次の唐の時代では、牡丹のほうがより改良され、長安の人々は、牡丹の時期になると狂うが如く牡丹を求めたということが、白楽天の詩になって残っております。この時代は、中国の牡丹栽培のピークだったのかも知れません。

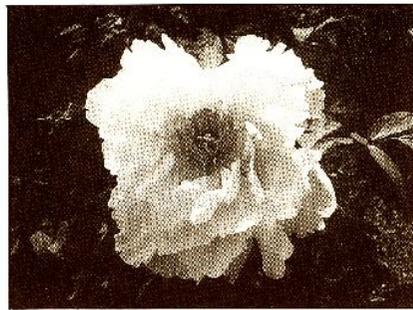
このように園芸植物を改良して、庶民に至るまでそれを観賞するといった歴史からみますと、中国は世界で一番早い国ではないでしょうか。

唐の時代ですから7~8世紀、その頃、まだヨーロッパ(ローマの街は例外です)はまったくの野蛮国です。これは皆さんご承知のとおりです。しかしコロンブスがアメリカ大陸を発見した後の、16世紀になってきますと、アメリカの植物のヒマワリ、マリゴールド、カンナなどがヨーロッパに入ってきて、ひとつひとつは熱心にそれらを栽培しました。

少し遅れてオランダ人が、日本にヒマワリなどを持って来ました。それで日本人もヒマワリ、カンナといったものを江戸時代熱心に栽培しました。それはその当時の絵をみればわかるわけで、江戸時代の木版になればなるほどヒマワリの絵がたくさん残っています。

以上のような事情で、園芸植物の本来の事情を説明した園芸の本は、元禄時代頃からあと次第に盛んになってきています。それらの本をひもといいてみますと、牡丹の品種もかなり出てきますから、すでに日本独特な牡丹を作っておったと思います。

それでは私が日本独特の牡丹とか中国の牡丹とか言っておりますが、どんな違いがあるのかということ、これは極端な一つの違いとして後でスライドで見させていただきますが、中国の牡丹は、八重になっておいて大振りに咲きます(No.1)。極端にいいますとその先が尖った形で、びっしり花弁が付いた花形になります。一方、日本では鎌倉時代に牡丹の模様がでてきますが、そのころから今日に至るまで、びっしり八重のようににかたまった形の牡丹というのはありません。日本の牡丹は(No.2)全部一つつき花弁が開いて、中の黄色い、今は花粉袋といっていますが、薬がたくさんついた状態で出てきま



白雲門(スライド No.2)

す。芯が現れて非常に広がった姿になっている。この姿がずっと一貫して、変わりません。

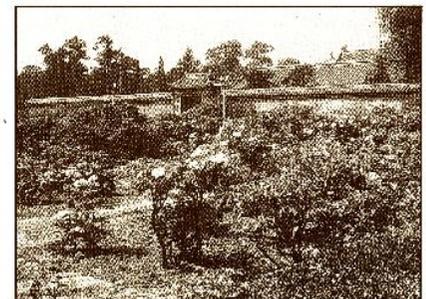
少し話が変わりますが、洛陽の牡丹を見に行きました時に、洛陽で作っている牡丹を見て、なるほどこれはもうおおお違いだと思ったのは、そこでは株たちがこうありますと、一段低く握って、その低くなったところに牡丹を植えているわけです。これは乾燥した国の特長なんです。私がさきほど申しましたように、ヨーロッパ、アメリカのほか南アフリカ、オーストラリア、さらに東南アジアや中国と、歩き回っているものですから、その理由がよくわかるんです。スペインにいきましたも同じことです。というのは、日本では必ず土を盛り上げて畝を作りそこに牡丹を植えますが、中国の西安の方では、低くしたところに牡丹を植えるわけです。乾燥した土地ではスペインも同じことですが、みんな握り下げて低くなったところに植物を植えています。これは水が少しでもたまることを希望しているわけです。日本の方は、なるべく水がはけて溜めてくれることを希望しますので、これはまったく逆になっております。それだけ雨がよ降って水がたまりやすい日本と、ほとんど雨が降らない所との違いです。そういう乾燥した国では、花は八重にかたまっても、いっこうさしつかえなく、長く八重の状態を保っていてもいいんです。けれども日本のように雨が降りますと、なかへ雨がしみ込んで花をだめにしてしまいます。だから始めから一つつき花弁がわかれていて、雨が降っても安全なようになっているのです。ですから日本の八重と、後で実際の牡丹の品種と絵に表わされた牡丹をスライドで見ながら、日本と中国の牡丹の違いを比較してお見せしたいと思ひます。

日本に入ってきた始めは、いずれも仏教の勉強に行かれた方が、持って帰ってきています。従ってお寺に牡丹は最初に入って来たでしょう。そしていろいろやってみると中国のようにはいきません。ですからこれを高いところに植えるようになりました。

そこで花壇、今日花壇というのは、いま花壇でも花をいっぱい作っています。あのような物を、花壇と言っていますけれど、本当の花壇は段をこう高くして牡丹を植えたのが本当の花壇なんです。それではどこにそれがのこっているかというところ、5月の初めごろ、京都の銀閣寺において、銀閣寺に入ったすぐのところに牡丹の花壇があります。石をこう組んで高く段を作ってその中に土を入れて、それに牡丹を



銀閣寺 花壇(スライド No.3)



牡丹園(中国)(スライド No.4)